

# 潮音寺だより

第 232 号

平成 15 年 2 月

電話 052-671-4831

ファックス 052-671-4856

E-Mail:choonji@aichi.email.ne.jp

<ホームページ> <http://www.ne.jp/asahi/choonji/namo/>

〒456-0034 名古屋市熱田区伝馬 1 -10-11

自<sup>じ</sup>策<sup>さく</sup>自<sup>じ</sup>励<sup>り</sup>  
求<sup>ぐ</sup>常<sup>じょう</sup>任<sup>じん</sup>

【出題】

善導大師「往生礼讃」



玉置善雄作

セカセカは  
いけませんぞ

仏の教えに  
しっかりと  
耳を傾けなさい

ウカウカも  
いけませんぞ

余命は  
日々刻々  
減っているのです

身体が  
動くときに  
気概も  
あるときに

考えるのです  
励むのです

自身の  
永久の安らぎを  
得るために

## 七不没法

仏教興起時における中インドに、アジャータシヤトル（阿闍世）という、マガダ国の王（在位前四九一頃〜四五九頃）がいました。彼は、仏典に登場する幾多の人物の中でも、ひじょうにドラマチックな経歴の持ち主であります。

父はビンビサーラ（頻婆娑羅）王、母はヴァイデーヒー（韋提希）であります。伝説によると、父王に子供がなかつたので、占い師に問うと、一人の仙人が死後、王の太子として再生すると答えたので、王は待ちきれず、その仙人を捜して殺害してしまいます。かくして生れたのがアジャータシヤトル（未生怨）であるといつのです。長じてこの太子は、ブッダ（釈尊）にそむいたデーバダッタ（提

婆達多）にそそのかされ、父王を獄中に幽閉してしまい、ついには餓死させて王位につきます。在位期間中、周辺の敵国を併合してマガダ国を一大強国としますが、父王に対する自分の行為を悔いて、大臣ジューヴァカ（耆婆）のすすめでブッダ（釈尊）に会い、仏教の熱心な帰依者となりました。

ブッダ（釈尊）は、この王の在位第八年の時に入滅されますが、その遺骨の一部を得て、都のラージャグリハ（王舎城）に仏塔を建立し、またラージャグリハ郊外で開かれた第一回仏典の結集のときには、必要な資材の一切を供与し、援助したといわれています。そして、三十二年の統治のち、王子のウダヤバドラに殺されたとも伝えられています。

そのアジャータシヤトル（阿闍世）とブッダ（釈尊）には、こんな逸話が残されています。

ある時、マガダ国の大臣ヴァッサカーラ（雨行）が、アジャータシヤトル（阿闍世）王の命によって、ブッダ（釈尊）を訪ねてきました。そして、言上しました。

「王は、今、断じてヴァッジ族を討たんと意図でございます。つきましては、そのことにつき、なんぞ世尊の仰せごあらば、われにもたらし伝えよとのことでございます。」

討伐の是非という、なんとも物騒な諮問であります。ところが、ブッダ（釈尊）は、それには何も答えることはせず、うしろから扇で風を送っていた弟子のアー

ナンダ（阿難）を顧みて問いかけました。

「アーナンダよ、このころもヴァッジの人々は、よく集会を営んでいるだろうか。」

「世尊よ、彼らは、今もよく集会を開き、集まりもよく聞いています。」

「ところが、集会がうまくいっている間は、ヴァッジには繁栄が期待せられる。衰え滅びる心配はあるまい。ところが、アーナンダよ、彼らは、今もよくなすべき義務を果たしているだろうか。」

「世尊よ、彼らは今も、力をあわせて、なすべき義務を果たしているに聞きます。」

「ところが、彼らがよく為すべきことを為している間は、ヴァッジは栄えるであろう。衰え滅びる心配

はあるまい。では、アーナンダよ、彼らは、昔からの掟（おきて）、今でもよく従って導（たも）っているだろうか。」

「世尊よ、彼らは、定められたことを破らず、ふるい掟（おきて）によく従っているように聞いております。」

「ところが、それがうまくいっている間は、彼らは栄える。滅びのおそれはない。」

そのように続けて、ブッダ（釈尊）は、ヴァッジの人々が、古来の尊敬、婦女子の保護、祖廟（むらと）の崇敬、聖者の尊重についても、それぞれいかに振舞っているかを、アーナンダに問いかけ、ヴァッジ族には、繁栄が期待され、衰えのおそれがないと、裁断したのでした。

大臣ヴァッサカーラ（雨行）は、その仔細をアジャータシヤト

ル（阿闍世）王に報告をし、王はヴァッジを征服することを断念したといひます。

さて、世界には、たくさん民族があり、そして、それぞれの栄枯盛衰がありました。今も、討ち栄えようとしている民族もあれば、その存亡の危機に立たされている民族もあります。

ブッダ（釈尊）がアーナンダ（阿難）に問いかけた七つの内容は、「七不退法」と名づけられています。民族の繁栄に関する七か条ともいふべきもので、イラクや北朝鮮ばかりではなく、わが日本においても、その一つ一つを照らし合わせて、考えてみる必要があります。さらには、わが家庭に置き換えてみると、いかがでありますか。

# 舍利

しゃり

「舍利」とは遺骨のことです。とくに仏陀の遺骨をさし、仏舍利とし、の舍利崇拜は釈尊入滅直後から始まり、舍利塔を建立して、舍利を供養、崇拜するというならわしは、中国・朝鮮・日本を含めてアジア諸国に広く伝わりました。仏舍利と称するものは、東南アジアの仏教国を中心に世界中いたるところにまつられていま

## 住職通信

自分自身に  
克つことは  
多くの人に  
勝つより  
一層まさる



で、仏舍利は非常に尊ばれ、八つの部族の人々が自分の国に仏舍利を持ち帰り、舍利塔を建て、後世そこから世

釈尊がクシナガラで入滅されたときには、遺骨が仏の身体（シャリーラ）そのものと考えられたので、仏舍利は非常に尊ばれ、八つの部族の人々が自分の国に仏舍利を持ち帰り、舍利塔を建て、後世そこから世界に舍利等が広まりました。仏塔崇拜が大乗仏教興起の要因の一つにあげられるほどで、仏教史上舍利崇拜の果たした役割は非常に大きいです。

舍利とはサンスクリット語のシャリーラを音写した語で、もともとは身体のことですが、複数形のシャリーラが意味する「遺骨」が転用されるようになったようです。

## 感謝

その。

新築庫裏への「寄付を、上村白



## 雑記

（ひんさちや）『仏教歴史百科』

男様、伊藤八重子様より頂戴いたしました。  
心より感謝申し上げます。

## ▼本山団参

本年の御忌会（四月）において、副住職が、始経師という大役を仰せつかりました。今から、少々緊張しております。できれば、檀信徒の方々と共に、ご本山にお参り出来たらと考えております。後日改めてご案内申し上げますので、ご参加下さいませようお願いします。

## ▼表紙

今月の表紙の作品は、玉置善雄・みち子ご夫妻による紙細工の労作です。他にも、宝船や鶴などたくさん頂戴しました

▼ギシギシとワイパーは  
凍て演歌聴く 沐魚